

## 抽象表現主義と進化生物学

### ―バーネット・ニューマンの1950年代後半における自作の体系化―

吉田侑李（ライス大学）

第二次世界大戦後のニューヨークで興隆した抽象表現主義の作家たちは1940年代前半、自然科学から影響を受けた有機的な形態を描いていた。バーネット・ニューマン（Barnett Newman, 1905-1970）は1930年代から1940年代初頭にかけて、大学や博物館で植物学、鳥類学、生物学などの講座を受講し、植物や細胞を彷彿させる形態の絵画やドローイングを制作している。やがて1948年になると、単色で塗られた画面にジップと呼ばれる垂直線を描いた独自の作風を確立した。本発表では、1950年代後半以降、ニューマンが分類・交配・遺伝といった進化生物学的な考えを下敷きにしつつ自身の作品の体系化を試みていたことを指摘したい。

ニューヨークのバーネット・ニューマン財団には、作家が使用していた教科書やノートが所蔵されている。その調査を継続する中で、植物や生物を分類した図表や、これらを主題とするニューマン自身のスケッチが多く含まれていることがわかった。ここには、異なる種を交配し新たな種が発生するというシステム、あるいは染色体や遺伝子のメカニズムに関する資料も含まれており、彼が進化生物学を熱心に学んでいたことが窺える。ジップ絵画という作風を確立した後、ニューマンは一見すると同趣の絵画を制作し続けた。しかし、1960年以降の作例を精査すると、過去の自作に見られる構図・色彩・サイズなどの特徴を組み合わせながら制作を続けていたことが確認できる。キリストの受難を主題とした代表作「十字架の道行き」（ワシントン・ナショナル・ギャラリー蔵）を同一のフォーマットをもつ大規模な連作にすることを1960年に着想していることから、この頃を境に過去の自作を再評価し、制作へと再利用する考えが生まれたと推察される。こうした自作の体系化とでも称すべき転回は、1950年代後半に作家としての評価を獲得したこと、そして自らを戦後美術史の中に位置づけようとする歴史化への志向とも並行するものであった。

イヴ＝アラン・ボワによる近年の研究は、ひとつの作品が他の作品と関連し合うような全体性を指摘している。ボワは、1948年の作風確立から晩年期までの作品群をひとまとめに捉えているが、上記のような転回を考慮すれば、1950年代後半を境にその画業の全体像を見直す必要があるだろう。また、進化生物学に関する深い関心と知識は、初期作例に見られる有機的な形態への接近だけでなく、1960年以降における自作の体系化の基盤をも形成する契機となった。本発表は、抽象表現主義の作家と作品に関して、自然科学からの知見が形態的なモチーフだけでなく、制作方法や自作の評価・歴史化というレベルにおいて、どのように内在されていたのかを示す事例を提供するものである。